

病院図書室における相互貸借と 文献入手方法の動向

林 伴子

I はじめに

昨今の医療情報の増加は著しく、1誌だけを見ても含まれている情報量は夥しい。こうした状況で、相互貸借が図書室業務の中では、欠く事のできないものとなってきている。そこで、今回、図書室の活性化というテーマのもとに、相互貸借について、あらためて考えてみたい。

サービスが各施設でどのくらい、また、どのようにして行なわれているのかという把握は、統計調査の結果として知ることができる。近畿病院図書室協議会では相互貸借を、各図書室間での相互協力活動の中心となるものと考え、会発足時より会報や研修会で会員への啓蒙を図り、推進のための各種の事業にも取り組んできた。

そこで、まず、近畿病院図書室協議会で今まで行ってきた主たる関連事業について簡単に触れた後、協議会で行ってきた統計結果について報告する。

II 関連事業

数ある事業の中で、活動の基礎となったのは1975年の所在目録の発行、1976年のBLLD（現在のBLDSC）クーポンの共同利用の開始、相互貸借用往復葉書の作成である。また、1981年には医学雑誌総合目録欧文編を発行し、1984年には和文編を発行した。欧文編は1987年に改訂版がでたが、1991年度には和文、欧文同時再改訂が予定されている。

以上のような相互貸借関連事業が協議会での相



互貸借活動推進に多くの影響を与えてきた。例えば、この総合目録に参加したことによって初めて依頼を受けた施設も多く、相互貸借サービスを始めるきっかけになった施設もある。また、研修会で他の施設の担当者を知ることにより、依頼しやすくなったという声も聞く。他にも色々細かい工夫を知る事ができた。

III 相互貸借調査

こうした事業を行なった上で、会員各施設での業務推進のための資料として、発足まもない1976年より相互貸借調査を行ってきた。

調査項目は、1979年までは依頼件数の調査を行ない、1980年より受付件数調査を加えた。また、1981年からは年次統計調査に組み込んで各会員施設に回答を依頼している。

調査結果は、1988年度までをまとめてみた（表1）。1989年度分は、集計作業中のため含めていない。

1. 回収状況：1979年までは回答率があまりかんばんしくないが、最近は70～80%と高くなっている。

表1

年	主な関連事業	回収状況			依頼件数			依頼先別件数						受付件数		
		会員数	回答数	回答率	調査対象機関	総件数 (平均)	最多	協議会 加盟	JMLA 近畿	JMLA 近畿外	海外	その他	計	調査対象機関	総件数 (平均)	最多
1975	病院図書室・ 医療関係雑誌所在目録発行															
1976	BLUDクーポン共同利用開始 相互貸借利用統計開始 相互貸借往復葉書の作成	38	21	55.3	21	3246 (155)	947	396	1745	1013		92	3246			
1977		38	15	39.5	15	3518 (235)	761	530	2094	814		80	3518			
1978	病院図書室・医療関係雑誌所 在目録(欧文編)追加版 医学雑誌総合目録:欧文編作成 開始	45	16	35.6	16	3449 (215)	910	485	2176	820		68	3449			
1979		50	24	48	24	5565 (232)	1289	842	2920	1582	66	158	5568			
1980		54	37	68.5	37	8197 (221)	923	1411	4118	2455	67	146	8197	21	1168 (56)	700
1981	医学雑誌総合目録:欧文編発行 和文編作成開始	56	39	69.6	36	8785 (244)	1349	2463	4495	1607	87	133	8785	30	1768 (59)	795
1982		60	34	56.7	28	7008 (250)	958	2156	3059	1495	86	212	7008	28	2957 (106)	879
1983		62	36	58.1	32	8363 (261)	1537	2735	3201	2241	59	127	8363	32	2750 (86)	713
1984	医学雑誌総合目録:和文編発行 医学資料の整理と利用 発行	60	36	60	33	6944 (210)	956	2576	2764	1461	31	112	6944	34	4097 (121)	754
1985		62	37	59.7	37	9651 (261)	1649	2880	2735	3547	24	465	9651	37	3858 (104)	599
1986		64	45	70.3	39	9294 (238)	1650	2771	3036	3034	21	397	9294	35	3392 (97)	456
1987	医学雑誌総合目録:欧文編第2 版発行	66	53	80.3	45	9701 (216)	1683	3186	2640	3147	21	707	9701	49	3652 (75)	526
1988		71	58	82	44	8874 (211)	858	3614	2657	2319	30	254	8874	40	3879 (97)	458

2. 依頼件数：1985年からは総件数で9000件以上になり、調査開始時から見ると約3倍に増えている。また、記録の不備などから回答の得られなかった施設もあるので、調査対象施設数そのまま相互貸借実施施設数ではないが、相互貸借を行なった施設数は年々増加してきているといえる。しかし、平均件数をみると1985年をピークに若干減少傾向が見られる。1施設での最多依頼件数が約1000件、あるいはそれ以上である事を考慮すれば他の平均はもっと少ないと言える。

3. 依頼先別件数：依頼の割合では、協議会加盟施設への依頼が医学雑誌総合目録の和文編が発行された1984年の37%を最高に30%前後である。目録から見るとタイトル数も1987年の欧文編改訂版で1013誌となり、病院図書室だけが所蔵している資料もかなりあったのだが、医学図書館協会加盟図書館への依頼件数は目録発行後も依然として多く全体の60%前後をしめている。JMLA近畿地区と近畿外との割合はほぼ半々である。

4. 受付件数：受付件数の調査は1980年から開始した。この結果も調査対象施設数が実施施設数ではないが、1987年には49施設、1988年も40施設と会員の6割から7割がサービスを行なっている。総件数と1施設での最多受付件数の比から分かるように、1施設に集中していたのが多少分散するようになってきた。また、受付先の大半は協議会加盟施設からのものであるが、ほとんどの年度で受付件数が依頼件数を大幅に上回っている。これは未回収の施設でも相互貸借を実施している事を表している。以上が13年に亘る調査結果のまとめである。

IV 相互貸借活動の現状並びに問題点

前述の調査結果から分かるように、依頼件数はここ数年、若干減少してきている。もちろん、図書室ができたばかりの所や、サービスを開始したばかりの所では今から利用者に相互貸借を知って貰おうと努力しているだろうから、今後増加してゆくと考えられるが、10年20年と図書室活動を続けてきた施設の担当者は減少を実感しているので

はないかと思う。この事だけを見ても相互貸借業務の在り方を今一度考えなければならない状況にある。なぜ少なくなってきたか、この原因はどこにあるかを考えてみたい。

最初に考えられる事は各施設の資料の充実である。協議会発足当時は各施設での所蔵タイトル数も少なく、またバックナンバーを余り所蔵していない状況であった。しかし、そういう図書室も時の経過とともに資料数も増え、利用者の要求に応える事のできる図書室に成長していった。協議会加盟図書室の中では中規模な当院でも15年前は洋雑誌47、和雑誌22タイトルだったのが現在は洋雑誌65、和雑誌61タイトルになり、そのうちで10年以上所蔵しているものが、76誌ある。文献検索を行う場合、10年位遡って探すことが多いので、院内でかなりまかなえているのではないかと思っている。

次に考えられることは、相互貸借サービス利用者の減少である。特に病院図書室での主な利用者であった医師が、文献入手に図書室を利用しなくなってきているのではないだろうか。今回の、この発表の為に医師の文献入手方法についてアンケート調査を行なおうと思っていたのだが、結局断念した。何人かの医師、それも図書室の常連組の医師に話を聞いた所、返ってくる答がほとんど同じで、これではアンケートを取るまでもないと思ったからである。その答というのは、普段から図書室に出入りしている人でも文献の入手には図書室の相互貸借を使わないという事である。もっとも中には着任して半年もたつのに、図書室で相互貸借サービスを行なっているという事を知らない人までいたので、これでは減っても仕方がないかなと、こちらのPR不足を反省した。

そこで、利用者数を知ることが現状を把握する一助になると考え、利用している実人数を調べてみた(表2)。現在の人数だけでなく、最近の変化も分かるように1985年から5年間分をまとめてみた。また、我々の図書室の数だけでは傾向が分かりにくいので、他の図書室にも協力して頂いた。

結果は86年、87年を境とした減少が顕著である。コピー料金が公費か私費かで利用者数、件数は違ってくるが、Aは公費、他は私費でいずれも同じ様

表2 相互貸借依頼実人数

*病床数 **医師数 ***複写料金

病 院 名		1 9 8 5	1 9 8 6	1 9 8 7	1 9 8 8	1 9 8 9
社 保 神 戸 * 402 ** 70 *** 私費	総 件 数	168	92	88	91	40
	医 師(件数)	16(143)	9(53)	6(33)	4(47)	5(13)
	そ 他(件数)	2(25)	3(39)	4(55)	4(44)	7(27)
A * 499 ** 80 *** 公費	総 件 数	735	777	552	454	454
	医 師(件数)	40(672)	46(608)	35(472)	36(409)	38(427)
	そ 他(件数)	13(63)	14(169)	18(80)	12(45)	7(27)
B * 519(TB65) ** 55 *** 私費	総 件 数	325	126	75	64	86
	医 師(件数)	7(309)	7(117)	4(72)	4(64)	4(51)
	そ 他(件数)	3(16)	1(9)	1(3)	0	2(36)

に減少している。また、この表では分かりにくい
が、新しく増えた人数は非常に少なく利用者は固
定化している。それにしてもなぜ図書室を使わな
いのかと言うと、結局は製薬会社のプロパーに依
頼する方が簡単だということである。プロパーへ
の依頼については、他の図書室でも同じ様な傾向
があるとの事であった。病院がこういったサービ
スを受ける事を禁止している所もある。しかし、
昔は索引誌で必要文献を検索しなければならな
かったのが、今ではコンピュータでの文献検索が製
薬会社のサービスの1つとなっていて、リストも簡
単に出して貰える上、必要と思えるものをチェッ
クするだけで入手可能で、費用もかからないとな
ると利用するのも無理はないと思えてくる。最近
の医師は、検査も増え、事務的な仕事もかなりこ
なさなければならないので、時間的にゆとりのあ
る人が少なくなっている。そうした人達にとって、
こういった製薬会社のサービスは非常に助かるも
のなのであろう。また、サービスを受ける事によ
って使う薬が変わるのかと医師に聞いたところ、
「そんなことはない、わざわざ変えるような事は
しないが、同じ様な薬の中から選ぶ時には多少は
考えることもある。」ということだった。

医師がそう思っているなら、サービスをしてい
る方はどうなのだろうと、大手の製薬会社のプロ
パーにも話を聞いた。文献入手方法を質問したと
ころ、地理的な事も考え、神戸近辺の医学図書館、
神戸大学とか兵庫医大などへ自分で行ってコピー
をとってくる、それでもない時には大阪なり東京

なりに頼んで社内便で受け取ることが多いという
事だった。

また、それぞれ入手の為に努力しているようで、
JMLAの現行目録を持っていたり、近隣の大学図
書館の所蔵雑誌も把握している人が多い。そのう
えで、無理はしないまでも、出来るだけ当日、遅
くとも2～3日以内の入手を心掛けているそう
である。また、最近はサービスを行なうメーカーも
増え、1人当たりの負担はそれほどでは無くなっ
てきたとのことである。費用は営業費として自由
になるお金の中から払っていることが多いよう
である。サービスをしたことで何らかのメリットが
あるのか聞いたが、それはあまり考えていなくて、
先ほどの医師の話と同じで、薬の売り上げなど
には期待はしないが、薬品選択の際に多少は影響
するかもしれないと思うという返事であった。

これ以外にも、医師が文献入手に図書室の利
用を考慮にいけない理由の一つに、今まで図書室
を利用した経験が少ない事もあるのではないかと
思う。学生時代に図書館を利用した人は少なく、
相互貸借の利用経験者はほとんどいなかった。医
師となった後も、図書館を利用するよりは各教室、
研究室に備えられた図書や雑誌を利用する方が
多く、文献検索、入手についても先輩医師からも
プロパーに頼めば良いと教えられているよう
である。楽な方法で文献を入手してきた人達ばかりが相手
では、図書室の利用を勧めても無駄かもしれない。

図書室を利用する習慣を身に付けて貰うとす
れば、学生時代が一番良い時期であろう。しかし、

図書館の利用指導というのは余り行なわれていない。近畿地区でも2、3の大学だけと聞いている。ただ、学生時代に利用指導をうけ、図書館サービスについて知ったとしても、今のこういう状況で病院図書室の利用を期待しても無理ではないかと思える。当然、図書室での相互貸借サービスについてのPRは必要であるが、どういう手段で文献を入手するかは、それぞれの選択に任せる以外にない。また、すべてを図書室で賄うとなると、大半の図書室では事務量や手間を考えると、対応しきれぬか疑問だろう。

V 利用者開拓と図書室の在り方

さて、医師の利用が減ったのなら、文献の入手手段を持たない医師以外の利用者のことをもっと考えてみてはどうだろうか。大方の図書室で、少しではあっても、医師以外の利用者からの相互貸借の依頼がある。我々の図書室の場合でも、そもそも医局の図書室から出発しているので、図書室は医師の為のものとは病院の中では見られがちだが、ここ数年は看護関係の図書、雑誌を増やしてきた結果、多少利用が増えてきている。まだまだ、PRが行き届かないが、新人看護婦への簡単なオリエンテーションを行ったり、文献について問合せがあった時には二次資料の使い方などを説明するようにしている。しっかりしたオリエンテーションを行なっている図書室なら、かなりの利用があることだろう。

また、病院の中には付属の看護専門学校を併設している所も多くある。当院にも看護専門学校がある。私も今年度より看護学校の図書の整理の手助けを引き受けている。そして、この事をきっかけに看護学生の図書の利用の実態を多少は知る事が出来た。情報検索を少しは授業で行なったとしても、折角調べた文献を入手出来ず、そのままになってしまっているという事であった。そこで、文献検索について学生に説明してほしいという依頼に応じて簡単な説明を行なったのだが、図書室でこんな事も出来るんだと、学生時代から知ってもらって、今後の図書室利用につながれば多少は役に足ったのではないかと思っている。カリキュラムが変わってこういった情報についての授業を

行なう学校も増えてくると思える。図書室担当者が直接指導しない場合でも、学生の利用を認めている図書室も多くあるので、その後のバックアップには協力できる図書室も多いと思える。図書室の利用法を知れば、必要文献の入手に相互貸借を利用するようになってくるのではないだろうか。同じ事が他の病院スタッフについてもいえる。病院職員には図書室が医師だけでなく職員全体を対象にしている事を知ってもらい必要がある。基本は広報活動の充実にあると考える。例えば、医学的知識を必要とするはずの医事課の職員の利用が全くとっていい程ない事をみても日頃のPRの必要を感じる。

このように、利用活動や広報活動をおこなって、一番利用しやすい立場にいる医師が文献入手に相互貸借を利用しないなら、相互貸借に費やさずに済んだ労力を他の利用者層の開拓に向けたと思っている。相互貸借活動は必要な文献、資料を手に入れる為のサービスであるから、何も件数の増加だけが目的では無いはずである。図書室の利用が習慣になり、本当に必要とした時に役立つ図書室になってゆけば、ともすればお金ばかりかかると事務部門からは冷たくあしらわれがちで図書室も、また、違った目で見られるようになってゆくのではないだろうか。

医師の要求が集中すればとても対応できないと言っておきながら他の職種の利用者を開拓して行くなど矛盾していると思われるかもしれないが、それ程、他の利用が少ないというだけの事で、急に増加するはずもないし、今からの努力が実を結ぶには時間がかかると思う。利用が増加してきた結果、人手、その他の面で十分に機能できないとなった時には図書室の重要性は浸透しているであろうから、それなりの対応策を考える事が出来ると思う。

以上は、施設の中でこんな事も出来るのではないかという話である。

VI 今後の課題

相互貸借は他の図書室との相互協力を最も必要とする業務であり、ネットワークを計ってゆくりえでの重要な目的ともなっている。相互貸借が減っ

てゆけば、極論すれば、ネットワークを形成すること自体が無意味になりかねない。ひとつの図書室だけで用が足りるなら、他の図書室を必要としない。逆に、他の図書室からの依頼を受ける事が、業務の負担になってしまうならば引き受けない所も出て来るかも知れない。しかし、ネットワークの果たす役割がそれだけでない事は、図書室担当者には良く分かっている筈である。

予算やスペースの面で制約を受けている図書室にとって、ネットワークは資料の分担保管、相互利用など、まだまだ真剣に検討して行かなければならない課題である。それに、今後利用層に医師以外の病院スタッフが増えてくるとなると、看護関係など、今まで医学図書館が収集にあまり力をいれてこなかった文献が必要になってくるだろうから、病院間の相互協力は今以上に重要になって行くと思う。

また、情報のネットワークだけでなく、人のネットワークも大切である。仕事をしていて、わからない事も、同じ業務に携わった人に聞くことができ、簡単な事項調査も依頼しやすくなる。そもそも近畿病院図書室協議会発足の目的には、司書としての資質向上があげられ、病院図書室間の連絡を密にして、文献交換や担当者の研修の場を作る事を目指してきた。この、資質向上という目的があるかぎり、もしも相互貸借業務が図書室業務として一定の成果を果たし終えたとしても、人の交流としてネットワークはますます大事になることであろう。幸いにも、協議会加盟施設の中には近隣の医学図書館の利用がしやすいという地理的条件に恵まれた施設も多く、文献の入手にはそれほど苦勞する事もない。しかし、この条件も大阪大学移転の様に、いつ変わるかわからない。相互貸借を行なってゆくなれば、文献入手だけでなく大きな意味での相互協力活動を続けて行かなければならない。

今、各地区でネットワーク形成への努力が行なわれている。文献入手というのが主目的であり、総合目録の発行を目指して努力を続けている。

今回私は、近畿地区では相互貸借が減ってきているという報告を行なった。しかし、前述したように、各施設の資料の充実といった、マイナスで

はない理由が一番影響していると思えるし、目録の果たす役割は言うまでもない事であるから、まずは、目録の完成を目指す事が大切だと考える。

最後に、先程の統計結果にあったように、依頼先別総件数の6割を占める大学医学図書館と我々病院図書室との関係を考えてみる。

担当者は文献依頼を行なう時、安く、早く、確実にという事を先ず考える。最近ではファクシミリを備える施設も増え、担当者も経験を積んだので、少しでも安く支払い方法まで考えて文献の依頼を行なっている。病院図書室同士なら、本当に簡単に早く手に入る様になってきたが、多くの資料を所蔵している医学図書館、特に国立大学の料金支払いについては、何とかならないのだろうかと思っている担当者も多く、入手までの時間と手間を考えて敬遠する事も多い。依頼する立場としては、もう少し簡便な方法を考えてもらえれば、利用者にもっと満足して貰えるのと思う。今後の大学図書館の変革に期待したい。

Ⅶ おわりに

以上、相互貸借の傾向についてみてきた。私の経験と、近畿地区を中心とした調査結果をもとにしたので、他の地区の図書室とは違っているところもあると思う。また違った意見もあるだろうから、いろいろな意見を出し合って、より良い方向へ進むよう努力して行きたい。

参考文献

- 1) 加島民子：近畿病院図書室協議会における相互貸借の歩み、医学図書館、29:214~221、1982.
- 2) 林 伴子：相互貸借活動の歩み、病院図書室、10:68~74、1989.